

ENDO Shinobu

Pro-ject Portfolio

場をつくりだすこと、サポートすること。
これが（おそらく）私のやりたいことです。
それは同時に、自分が求めることであり、
経験してきたことそのものです。

私が目指す「場」にはかならず人々がいます。
その人々がつながっていくことを、
その人々が自分の心をふるわせるだけの感動を、
その人々がお互いの考えや想いを分かち合うことを、
それ以前にまず、
その人々が純粋にワクワクして楽しんでいることを。

こういうことをつくり出したりサポートしたり、
そういう想いで動いてきたし、
そういう想いで動いていきたいです。

人のつながり
心がゆれる感動
想いの共有
楽しさ・ワクワク

自分の興味をふりかえったときがありました。
それまでに関わったことを思い返すと、
5つのキーワードが浮かんできました。

大切にしているのは、そのキーワードのかけ合わせ。
1つでもヒットしていればワクワクするのですが、
それらがかけ合わされるとき、大きな可能性を感じます。

教育×ことば×地域×ICT×音楽

正直にいうと、5つのキーワードはあとづけです。
でも、自分の行為に意味と価値を織り込んでいるなら、
むしろあとづけの方が意味があると思います。

自分にとっての意味と価値を意識して、
自分の取り組んだプロジェクトをまとめてみました。

個人研究プロジェクト ・英語インタラクティブ フォーラムの実証研究

教育×ことば



○コミュニケーションは技で解決できる。そのための英語。

他人と・自分と「意味と感情」をやりとりするコミュニケーションという行為は、人間生活において避けて通ることのできないものです。しかし、現実の世の中を見ていると「もうすこし、ことばのやりとりが上手くいってれば防げたらなあ」と思うことが多く起こっています。コミュニケーション上の行き違いを乗り越えるためには、相手とやりとりしたいと思う態度と、相手とやりとりする上で必要な技が必要だ、と私は考えています。

人見知りだったり社交的だったり、そうした性格上の要素以前に、これさえ身につけておけばある程度うまくいくスキルがあるだろう。学校教育こそ、そうしたスキルを身につけるチャンスじゃないだろうか。特に英語という教科で、自分の母語とはちがう言語でのやりとりを通じて、楽しさ・難しさを学び取ることができるんじゃないだろうか。私はそう確信しています。

○中学生の時に感じたことを、今の中学生にも感じてほしい。

大学入学から修士課程まで続けて、茨城県で行われている英会話コンテスト「インタラクティブ・フォーラム」を追いつけています。当日発表される組み合わせで、初対面の3人の中学生が、与えられたお題に対して英語で会話をします。評価は、個人の英語の技能知識よりも、グループで円滑にコミュニケーションができていくか否か、に重点が置かれています。

私は、この実践にコミュニケーション教育の可能性を感じています。それは、自分自身がこのコンテストを通じて、人と話すこと・通じ合うことの楽しさや難しさを感じたからです。中学校の時の原体験が、自分以外の生徒たちにも当てはまるのかを確かめたい。そういう動機で研究を続けています。そして、どうやら現在でも多くの出場生徒が、コミュニケーションの大切さを感じ取っているようです。

主な成果：

慶應義塾大学総合政策学部 優秀卒業プロジェクト受賞(2010年度)

英語指導サポーター

- 事業評価研究
- 教材作成プロジェクト

教育×ことば

○やったことは改善しないと意味がない。

自分の個人研究の延長で、中学校時代にお世話になった先生から、教育委員会オフィシャルの「英語サポーター」に任命されました。その年の秋から、中学校における放課後英語補習の事業がスタートしました。大半の生徒が塾に行くなかで、「できない」生徒を対象とした補習を放課後に行います。地域のオジサン・オバサンと共に、地域人材として学校に入り、20数名の生徒を前にプリント学習をしました。

地域の人材が学校に入り、教師のサポートをし、また生徒が地域住民と交流する機会が生まれるということに大きな意味を見出し、その政策としての効果を検証したいと思い、学校のレポートとしてアンケート調査を生徒・学校・サポーターの3者に実施しました。結果は報告書にまとめて教育委員会に提出し、次の年度からの改善点に組み入れられました。

○生徒自身が自分の星を形作ってほしい。

サポーターの活動の2年目には、サポーターで独自の教材を開発するというプロジェクトが立ち上がりました。既存の問題集を利用することは費用面から難しいため、教材を一から開発していくことになりました。私は、このプロジェクトで実際の開発の中心になり、自分よりもひとまわり上の世代の「お母様方」のサポーターと共に教材開発を行いました。

見た目にキレイで分かりやすい説明ページ、基礎チェックのための選択問題、語順間隔を身につける並べ替え問題、文法の変形練習をする問題、そして和訳・英訳問題という5つのステップを持つドリル形式の教材を制作しました。Five Starと名付けたその教材は、5つのステップで星を完成させる、というコンセプトで制作しました。活動3年目になる今年も改良が加えられ、全サポーターが使用する共通教材として使われています。

主な成果：独自教材「Five Star - English Support」制作・編集

Five Star - English support 解説のページ - 1 / 5

1 be動詞 (～です, ～います)

0. be動詞のかたち

I (私)	→	現在(いま)	am	過去(むかし)	was	be動詞の意味は、 ・～です(だ) ・～います(いる) be動詞の原形(もとの形)は、beである
You (あなた)	→	are	were			
He (彼) / She (彼女)	→	is	was			
We (私たち) / They (彼ら)	→	are	were			

1. 「～です/でした」：肯定文

あなたは 健 です。 彼は 幸せ でした。

現在形 過去形

あなたは です 健。 彼は でした 幸せ。

You are Ken. He was happy.

○○は です/でした (be動詞) ～。

2. 「～ではありません/でした」：否定文

現在形 (肯定文：ふつうの文) (否定文：「ではありません」)

You are Ken. You are not Ken.

過去形 (肯定文：ふつうの文) (否定文：「ではありませんでした」)

He was happy. He was not happy.

be動詞の後ろにつく not

3. 「～ですか?/でしたか?」：疑問文

現在形 (肯定文：ふつうの文) (疑問文：「ですか?」)

You are Ken. Are you Ken?

過去形 (肯定文：ふつうの文) (疑問文：「でしたか?」)

He was happy. Was he happy?

疑問文の時は…

- ・be動詞が一番前に来て、はじめが大文字になる
- ・「○○は」(主語)はbe動詞の次にくる

ドイツ語教材開発プロジェクト

- Podcastシステム改善
- シンポジウム企画

教育×ICT



○すでにあるものをより良く、使いやすく、簡単に。

慶應SFCは、情報技術研究と共に、外国語教育も特異なキャンパスです。学部時代に履修していたドイツ語のセクションでは、ICTとマルチメディアを積極的に取り入れた授業展開をしていました。学部1年生後期からは、それを研究する「ドイツ語教材開発研究プロジェクト」に属してきました。ここではじめて、Linuxサーバに触れました。

主に携わったのは、Podcastによる教材動画配信の改善です。元々、教材動画をダウンロード・Podcast配信するシステムがあったのですが、当時出たばかりのiPhoneに対応していなかったことと、管理がしにくかったことなどの点から、思い切ってシステムを移行し、既存のブログソフトを改良してPodcastサイトを新たに作りました。また、当時スタートした企画で、授業中に書いてもらった4コママンガスキットに声を吹き込んで映像化して配信するという教材においても、それまで動画ソフトを使っていたものを、より簡単だからとMacのプレゼンソフト・Keynoteを使った作業に変更しました。

既存のサービスを使ってできるe-Learning環境は、特に非・エンジニアである語学教員にとっては重要だと考えています。0を1にするよりも1を2にする方が得意という自覚も、ここで生まれました。

○「攻め」と「学生中心」のアピール。

慶應SFCは、毎年11月に六本木で研究発表会をしています。当然、このプロジェクトも出展するのですが、毎年注目を浴びないままの状態が続いていました。学内からでさえも、です。

そこで、大学4年の時に担当教授に掛け合い、シンポジウムを企画しました。プロジェクトの学生が自分の外国語学習経験に基づいてICT教材を作り、それに教師が助言と理論的裏付けを与える、というスキームをどうしても来場者に知ってもらい。その思いで、学生開発者を前面に押し出したシンポジウムを実施しました。単なる発表にとどまらず、来場者と共にアイデアを共有するワークショップをリアルとTwitter上で実施し、そこから新たな教材のヒントが生まれました。

主な成果：Podcast配信 d-Pod(<http://dmode.sfc.keio.ac.jp/d-pod/>)
ORF2010・シンポジウム「毎日を教科書にしたい！」実施

地域活性化活動 「イルミネーション湘南台」 ・点灯記念イベント企画

地域×音楽

○地域の魅力と人々のつながりをつくる灯り。

「イルミネーション湘南台」という活動は、神奈川県藤沢市・湘南台駅を中心とした東西の商店街にイルミネーションを取り付けるという事業を中心に、地域住民・商店街・企業・行政・学生が一緒になって取り組む活動です。イルミネーションには手作り感があります。また、駅地下通路中央に設置するクリスマスツリーも、子どもたちの手作り装飾で、温かみを持たせています。

灯りをつけることは手段です。さまざまな事業を通じて、地域のさまざまな人々をつなげるとともに、地域の魅力を地域住民自身が発見していくことを一番のミッションとしています。

○手作りのイベント運営。

そのイルミネーションが灯り始める日に駅地下通路で行われる点灯記念イベントは、多くの集客があるイベントです。地元を中心に活躍する音楽団体の演奏やダンスで点灯までのテンションを高めます。

私はこのイベントの担当者として、出演団体交渉からタイムライン管理、ステージ配置管理、音響や機材の手配・依頼など、イベント運営の数多くの部分を担いました。しかし実際には、メンバーだけでなく、地域住民の方々の自主的な動きに多くの部分を担っていただきました。まさに、全員総出の手作りです。

○みんなで灯りをともらいたい。

2008年度は主たる担当者兼司会者として、イベントのコンセプトづくりをしました。特に重要なのが、点灯へ向けてどのようにつなげるか、です。その点灯の瞬間の演出が、本番5日前になっても全く思い浮かびませんでした。意固地になっていた自分を落ち着かせた時に思い立ったことは、「会場みんなの力で灯りをともらいたい」ということ。イルミネーションは地域みんなのものだという意識を持ってもらいたいという願いに行き着いたのち、ルミカライトを会場全員に配ってその灯りをツリーに向けて振りかざすことで点灯するという演出を企画しました。本当に灯った瞬間は、涙が出そうになりました。

主な成果：点灯記念イベントの主催者発表動員数：述べ1000人



地域活性化活動 「イルミネーション湘南台」 ・学校連携企画

地域×教育



○街を担っていく存在は子どもたちだから。

「イルミネーション湘南台」にかかわっている学生は、いつか湘南台の街を離れてしまいます。街の未来を担っていくのは、その街に住む住民自身、特に子どもたちだと考えていました。同時に、子どもたちの明るさや笑顔や夢は、街自体とそこに住む大人たちを明るくするだけの力があると考えていました。イルミネーション湘南台の活動において、僕が子どもたちや学校との連携を意識したのはそのためです。

○子どもたちの絵が街を飾る。

子どもたちの想像力・創造力の豊かさには圧倒されます。幼稚園の生徒にクリスマスにまつわる絵を描いてもらって飾っていた企画を、私が担当した時に「自分だけのクリスマスツリーをデザインする」と改めて実施しました。みんな思い思いに自由に絵を描き、色鮮やかなクリスマスツリーが駅地下の壁一面を埋め尽くしました。

小学校以上の生徒向けに、「ぼくらの好きなこんな街」という企画をしてもらっていましたが、私が担当した年は「ぼくらの街にありがとう」と題して、自分が知っている街の魅力を書いてもらいました。大人たちが気づかない街の魅力を、ことばと絵で小学生たちは表現してくれました。気づきを得たのは、むしろ私たちの方でした。

○自分が街を創っていくという意識。

中学校の生徒にはそれまで、ずっとボランティアとして事前準備やイベント当日の運営に携わってもらってました。私がその担当をした時には、単に言われたことをやるだけではなく、自ら考えて動いて欲しいという思いから、イベント会場の装飾を生徒たちに考え・作ってもらったり、点灯の瞬間の演出に参加してもらいました。

学校を超えたボランティアどうしのつながりが生まれ、高校生になった生徒たちがスタッフとして帰ってきてくれました。そのスタッフたちに点灯の瞬間の演出をすべて任せ、それが成功を収めた時に彼らが流した涙を忘れることはできません。

主な成果：幼稚園企画「クリスマスデコレーション2」実施
小学校企画「ぼくらの街にありがとう」実施
中学生ボランティア受け入れ

吹奏楽サークル「Dolce」

- 演奏会MC
- 地域での演奏活動

音楽×ことば
音楽×地域



○ステージから語りかける快感。

演奏会というと、音楽を聴くだけと思いがちですが、実際は演奏そのものに加え、振り付け、舞台装飾、そしてアナウンス、すべてを動員した演出で作り上げられます。特にMCのアナウンスは、演奏会のストーリー設定を伝えるうえで重要な役割を担っています。なぜなら、演奏する曲目の選曲自体にも、ストーリーがあるからです。

演奏曲と演奏会のストーリーを聴衆に伝え、聴衆の「聴くテンション」を高めることが、司会者の役割です。ことばを通じて、音楽の魅力を伝え、聴衆を感動や楽しさへと誘うこと。みんなで創り高めてきた音楽を届ける一歩手前の役割として、やりがいと快感を感じます。

○自分たちの音楽で地域を元気にしたい。

たとえば、地域のお祭りで、そこに音楽があるだけで気分がワクワクするようなことがあると思います。地域のイベントで演奏させてもらうことは、単に自分たちの演奏を聴いてもらうこと以上の価値があると思っています。

年に一度の定期演奏会や、2年連続して出場した「Disney Music Festival Program」は、自分たちの活動の目標として位置づけていました。しかし、それだけでは飽き足りないと、私が副代表を務めた時から、地域での演奏活動をスタートさせました。

地元商店街のイベントでの演奏依頼を受け、ジャズやポップスの音楽を演奏して聴衆に楽しんでもらうミニ演奏会を企画。楽器の運搬を地元の方に手伝っていただいたり、商店街から差し入れをいただいたり、演奏会後にはそのままイベントを楽しんだり。ただ演奏して帰るだけでなく、地域の方と団員を交流させるという私の目論みは見事に成功しました。

主な成果：

- 定期演奏会実施（神奈川県立音楽堂ほか）
- 東京ディズニーリゾート パーク内での演奏（2年連続）
- 湘南台地域での演奏活動 [いずれにおいても司会を経験]

慶應SFCオープンキャンパス ・学生ガイド

教育×ことば



○目指したのは、ジャングルクルーズみたいなキャンパスツアー。

高校時代、最初で最後のオープンキャンパスが、現在通っている慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスのものでした。その時に受けたキャンパスツアーや学生との相談コーナーを見て、「僕ならばこうやりたい。いや、これがやってみたい」と強烈に思いました。そして念願かなって入学して、晴れてオープンキャンパスの学生スタッフになりました。

SFCのオープンキャンパスは、単にキャンパスツアーの実施や学生との相談コーナーを設けているだけでなく、学生の自主企画として、キャンパスツアー練習会を行ったり、当日には学生ステージ企画を行ったり、学生スタッフ作成のパンフレットを配布したりします。

なかでもキャンパスツアーは、決められたセリフを言うだけでなく、いかに来場者を惹きつけるかに重点を置いています。その中で私は自分なりの工夫を加え、ハキハキと・おもしろい解説を心がけ、ディズニーランドのジャングルクルーズを目指したキャンパスツアーを実践してきました。今では、「学内一のキャンパスツアー」と言われるほどのツアーを実施しています。

○目指したのは、ジャングルクルーズみたいなキャンパスツアー。

炎天下の中、多いときでは1回に40人程度の一団を一人で率いて、30分ほどキャンパスの中を大声を張り上げて案内するのがキャンパスツアーの内実です。ですから、来場者の体調にも気を配りつつ、隊列を組んでもらうなどのアナウンスを事前に話しておくという工夫を加えました。今ではそれがスタンダードです。

また、場合によってはコースを変えたり話題を変えたりしなければなりません。そのためにキャンパスに関するあらゆる知識を知っておく必要があります。例えば、「福沢諭吉像の目線の先にはエアーズロックがある」という噂がありましたが、それも真偽を確かめました。

何より、自分の属するキャンパスに対して、冷静な目を見た事実と同時に、強い自信と愛情を持っています。自分が良いと思ったものを自信を持って人に伝えられることから、常に達成感を得ています。

学習塾アルバイト

- バイト幹事
- “卒業プロジェクト”

教育
ICT



○バイト幹事として、経営者と学生の間で考える。

大学1年生から、個人経営の学習塾の講師として、主に英語と国語を担当するアルバイトをしています。5年の間、毎年かならず受験学年の担当を全うし、進学志向の高い生徒たちを上位の高校に入学させるよう、特に学習の動機づけに働きかける指導をしています。

大学2年生の頃から、十数名いるバイトスタッフをまとめる「幹事」のメンバーに選ばれ、経営者たる塾長とともに、生徒募集や業務改善、授業改善に関して様々なプロジェクトに携わりました。例えば、生徒数増加を目指して、小学校6年生家庭に向けてのダイレクトメールの企画・デザインを行いました。

学生スタッフにとっての最大の使命は、いかに成績を上げるか、に尽きます。そのために、どのように授業を改善していったら良いかが喫緊の課題となりました。私は幹事の立場で塾長に対して、それまでになかった「教科会」の実施を提案し、自主的勉強会として「教科会」を開催しました。同じ教科の担当者同士でのナレッジが共有されるようになり、その学びが授業に還元されるようになりました。

○サークルみたいなバイト仲間を送り出す時。

個人経営の学習塾だからこそ、スタッフ間の結束が強く、業務の枠外でも遊びに出かけたり食事に行ったりしています。幹事になってからは、この業務外での遊びの結束が、業務におけるコミュニケーションにつながるということを痛感しました。

そんなバイト仲間は、メンバーが大学卒業とともに去っていく際には、かならず「卒業プロジェクト」を行います。メッセージビデオに始まり、卒業生以外全員総出でテレビ番組のパロディやラジオ番組を自主制作してきました。バイトの仲間入りをして以降、ほぼ毎年、編集作業は私が担ってきました。はじめての年は、制作の途中で仲間と方向性が合わずに衝突し、それでも我を通したことがありました。それ以降の年は、かならずメンバーと一緒に企画し、メンバーのイメージを常に伺いながら作品づくりに徹しました。

主な成果：「教科会」の実施・通算3回

卒業プロジェクト（映像制作2本・ラジオ番組制作1本）

リアル熟議を実施する学生の会

- ・公式Web制作
- ・ソーシャルアーカイブ

教育×ICT

○政策系・教育系にインターネットを活用したい。

「リアル熟議」は、鳩山・管政権で文科副大臣を務めた鈴木寛氏が旗振り役となって行われた、教育政策形成のムーブメントです。関係するアクターが、「自分のできること」の視点で課題について話し合う取り組みです。大学生主催としては初のリアル熟議が2010年7月24日に実施された際、私はスタッフとして主にICTを担当していました。

教育系や政策系の学生は、どうしてもITを活かした情報発信に疎いという問題意識を持っており、メンバーに組み入れられた時からホームページやTwitter、Ustreamの活用を任せられました。独自ドメインとレンタルサーバーでWordpressを用いた公式Webサイトを立ち上げました。ブログの機能を用いて準備状況を知らせながら、同じアドレス内で申込みフォームを設置しました。既存のプラットフォームを用いながら、それを最大限活かす強みを発揮できたと思います。

○議論した成果を後々まで残す。

当日の熟議は、小グループに分かれて、ファシリテーターがサポートをしながら、ホワイトボード・付箋等を効果的に使いながら行われました。ICTチームとしては、当日の様子をデジタルアーカイブで残していくことを念頭に置き、会場を動き回ってTwitterにつぶやきを投稿していく役割と、Ustreamの中継を3チャンネル（副大臣等のゲストを追い続けるチャンネル、一つのグループの議論を放映し続けるチャンネル、最初と最後の全体セッションを放映するチャンネル）展開する役割を設けました。それらのソーシャルメディア・アーカイブは現在でも公式サイトから見るすることができます。

また、私自身が独自に企画したものとして、熟議を通じて自分にできることをしたための「私の熟議宣言」と共に、参加者の顔写真を撮影したFace Albumという企画があります。このような形で、考えたり議論したりした結果を残していくことが重要だと考えています。

主な成果：公式サイト <http://real-jukugi.org/> 制作



文科省熟議協働員

- 教職員熟議Saitama
- 就活熟議キックオフ

教育×ICT

○現場の先生たちによる熟議をサポート。

大学生熟議の成功を受けて、文科省から「熟議協働員」というボランティア委員の役割を与えられました。その関係で、埼玉県で学校の先生が熟議を開くということを見つけ、スタッフとして加わりました。ちなみに埼玉県は高校を過ぎた土地としてゆかりがあります。

当初は、主にITによるサポートのつもりで関わりはじめましたが、リアル熟議の主催団体の一員であったことから、議論の設計部分を、スタッフである教員の皆さんと一緒に考えていきました。ちょうど、学校の教員になりたいと強く思いはじめた時期だっただけに、「学校をチームにしよう」というテーマを掲げて熟議に取り組んでいる先生方の姿から、教育に対してひたむきに・真剣になることの大切さを学びました。熟議の成果は、埼玉県教職員施策提案制度を通じて埼玉県教育委員会に提案書として提出されました。

○就職活動をしていないのに就職活動を語る。

大学生リアル熟議の主催団体の学生メンバーが集められ、文科省で「就活熟議キックオフ座談会」というのをやると知らされました。熟議懇談会という組織の委員である方々（GREE・田中社長、イー・ウーマン・佐々木社長）と座談会をする折、これまでに行われた大学生熟議の結果をまとめて発表するということになりました。その時、私はすでに大学4年生の最終学期が終わり、大学院進学を待っていました。

“積極的非就活生”だった私が、就職活動を語る立場になってしまい、それまでの熟議で話し合われた成果が学生の総意ととられてしまい、何とも心苦しい時間を過ごしました。ですが、この時になってようやく、就職活動が変わりつつある、ということ意識しました。

主な成果：

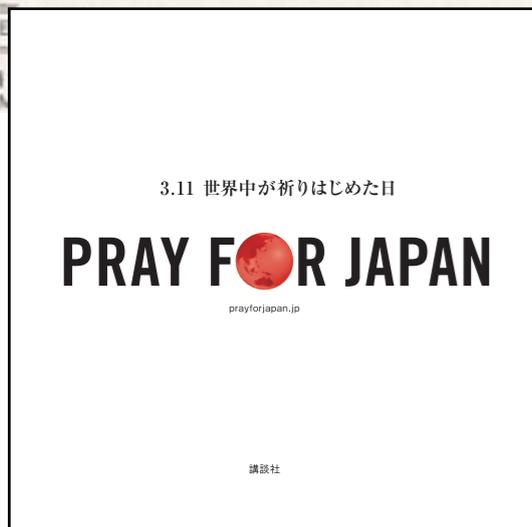
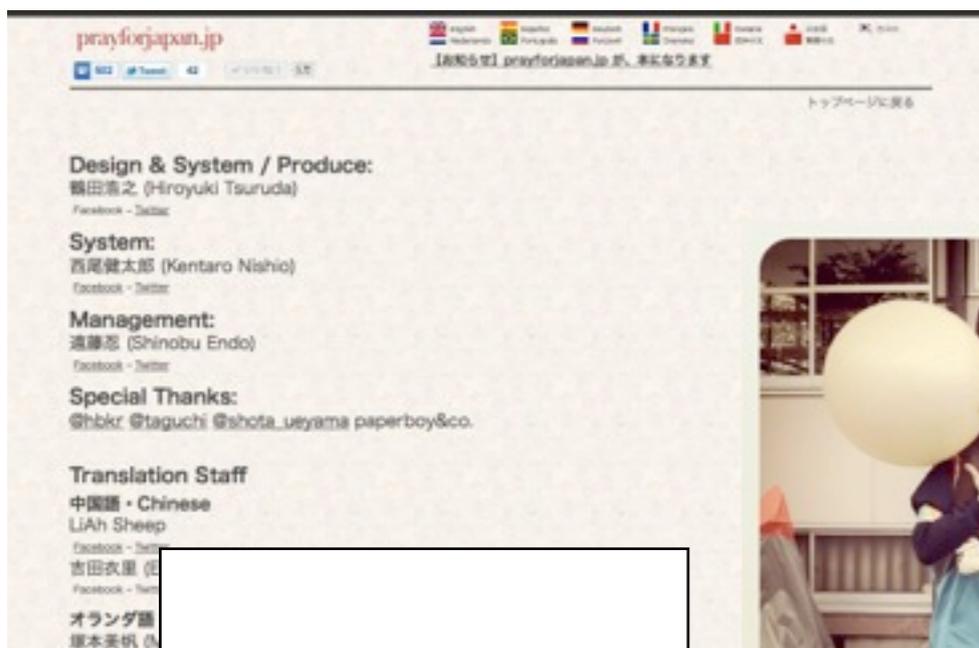
- 教職員熟議Saitama 公式Web (<http://real-jukugi.org/t-saitama>)
- 就活熟議キックオフ座談会 (<http://www.ustream.tv/recorded/13013703>)



prayforjapan.jp

・ 翻訳プロジェクト

ことば×ICT



○「ありがとう」と「大丈夫」を多言語で伝えたい。

2011年3月11日に発生した未曾有の大震災は、私自身を「何かしなきゃ」という行動に駆り立てました。震災直後に力を発揮したTwitterでは、たくさんの「#prayforjapan」のメッセージがつぶやかれました。大学の後輩が、ハッシュタグのついたつぶやきや写真を一覧できるサイト「prayforjapan.jp」を立ち上げ、そこに「心に残るつぶやき」を収集するコンテンツをつくりました。

多くの人々が「心に残るつぶやき」によって不安を拭いていく姿を見て、きっと在日外国人たちも、これらのメッセージを母語で読めば安心するかもしれない、海外から寄せられた多くの支援に対しても、多言語で「心に残るつぶやき」を翻訳すれば応えることができるかもしれない、と思い、TwitterとFacebookで多言語翻訳を呼びかけました。

顔も知らない国内外のボランティアは総勢20名以上。日本語も含めた12の言語による「心に残るつぶやき」がサイトに掲載されました。自分も含め、皆「なにかしたい」という想いで翻訳が進みました。

○救わなきゃいけないのは、人々の不安である。

その後、サイトは書籍化され、重版含め6万部以上が販売されました。600万円相当の印税はすべて被災者支援にまわることとなりました。書籍には翻訳ボランティアによる英訳が付きましました。現在、プロジェクトは電子書籍による多言語出版を目指しています。

震災から半年が経ち、ふとプロジェクトを振り返ると、最初でこそ日本に住む外国人の不安を取り除きたいという想いで取り組んできましたが、実は翻訳によって救われたのは、非被災地でプロジェクトに加わったボランティア自身であると考えました。ソーシャルメディア時代のあたらしいボランティアの形として、翻訳プロジェクトに携わっていることに誇りを持っています。

主な成果：

- ・ <http://prayforjapan.jp/message> 多言語翻訳マネジメント
- ・ 書籍『PRAY FOR JAPAN - 3.11 世界中が祈りはじめた日』出版
- ・ 印税のうち初版分を「ハタチ基金」に寄付

その他のプロジェクト



ドイツ語研究室SA

慶應SFCのドイツ語教員の職員室にあたる「ドイツ語研究室」の学生アシスタントを2年経験。主に、新入生が入ってくる時期に必ず行う「言語ガイダンス」の企画を担当し、【ドイツ語最短会話講座】や某携帯会社のCMからインスピレーションを得たオープニングムービーを作成。ドイツ語履修者から「ドイツ語はノーマークだったけどガイダンスで履修を決めた」と言わしめた。他に、学園祭ではドイツソーセージを焼く係を担当。

未来創造塾ハウスプロジェクト

慶應SFC学内に建設が計画されている滞在型教育研究施設「未来創造塾」の計画の一部で、滞在施設における新入生のコミュニティづくりの実証プロジェクト。クラス概念のないSFCにおいて、どのように新入生の居場所づくりをするかを考え、毎月イベントを企画。また、様々な講師によるワークショップを受講。中でも元楽天副社長・本城氏のWSでは、自分と他者に向き合うということをとことん考えた。



小出国際雪合戦ツアー実行委員会

通称「ゆき実」。イルミネーション湘南台メンバーを中心に、社会人雪合戦チーム「TEAM冬將軍」を結成し、年齢や職種、団体の枠を超えた構成で、新潟県魚沼市・小出国際雪合戦に出場するというツアーを企画。実行委員会の中では、アイスブレイク担当として、主にバスの車内で初対面どうしからのチームビルディングと雪合戦に備えたテンションの高揚を、バスでできるレクリエーションを使って実施。成績はベスト32。

その他のプロジェクト

プロジェクト結コンソーシアム

東北大震災で被災された子どもたちの遊びと学びを支援することを目的として設立された、社会人プロボノによるプロジェクト。現在は、宮城県石巻市を活動拠点として、平日1週間のプログラムにボランティアを派遣。このプロジェクトにおいては、事務局スタッフとして、主に学生団体等との連携をはかり、学生からのボランティア参加者を増やす役割に従事。

湘南台・ふれあい友情キャンプ

神奈川県藤沢市・湘南台地区の子どもたちを、長野・八ヶ岳に連れて行く夏休みのプログラムで子どもたちのキャンプリーダーに従事。学校も学年もごちゃ混ぜの子どもたちのグループと共に2泊3日を生活する。また、キャンプファイヤーやキャンドルナイトにおいては、レクリエーションの構成を担当することに命を燃やす。

学級規模適性化研究

国立教育政策研究所の研究で、小学校1年生にだけ導入された1クラス35人化をすべての学年で実施するためのデータ収集の研究の補助をする予定。教育心理学の学者と共にアンケートの分析を行うほか、学級規模の異なる教室に定点カメラを設置して、1日の学級の様子を観察する研究も実施予定。

○「教育」のきっかけ

大学生になる前までは政治家になりたかったのに、大学に入ったら教育をやるようになりました。ずっと教育については思うことがあった、というか、教育に対する危惧を抱いていたのですが、それはメディアによってつくられた危惧の用な気がしています。それよりも、可能性を信じる方が強かったかも。

思えば、学校成功者だった私は、小中高と恵まれた環境のなかで、生真面目に育ってきました。でも、そのなかで出会った学校の先生はみんな素晴らしい先生ばかりで、その先生のもとで得た経験は、すべて思い出になっています。小学校4年生の時の縄跳び大会団体戦で小6を負かしたり、小6の縄跳び大会では逆に逆転負けして悔し涙を流したり。今でも尊敬する小学校時代のクラブ活動の顧問は、おもしろい・クリエイティブな管理職でした。中学校では、体育祭に燃え、合唱コンクールに燃え、でも最終学年の合唱コンクールで優勝できなかった悔しさは、指揮者ただだけに未だに忘れられません。思えば、人の気持ちを考え、苦しみ葛藤したのも中学生の時でした。一方の高校時代は、自分の進路との葛藤の時期、そして他者とうまくやっていくことへの難しさを感じた時期でした。その中でも、スピーチコンテストやオーストラリアでの海外短期研修という恵まれた経験を積むことができました。

きっと、こうした自分が得られた経験を、還元したいという気持ちが強いのかもかもしれません。自分の受けた教育が自分にとって最良のものだったからこそ、そして無類の学校好きだったからこそ、今の自分は教育を志向しているのかもかもしれません。

○「ことば」のきっかけ

大学生になって自覚したのは、例えば立食の席で初対面の人と関係性を結ぶことにストレスを感じたり、自分から「おもしろい話」ができなかったり、ということです。それまでの自分は、人と話すことへの抵抗がなかったつもりでいたのですが、どうやらそうではなく、実は人見知りな部分もあるということがだんだん分かってきました。

それでも、僕はある程度、場に合わせたりあえて合わせなかったりしながら、他者と話をすることを楽しもうとしていることが多いと思っています。それはやはり、中学校時代に「英語インタラクティブフォーラム」という英会話の取り組みを通じて、他者と話すことが楽しくて難しいものだと感じ取ったからだと思います。それ以前から、スピーチコンテストに出場したり、エッセーコンテストで賞をとったり、あるいは人前で話して褒められたりすることをうれしいと感じていました。ことばは、自分に自信をもたらすものだったのです。

ことばは凶器にもなります。不用意な発言で人を傷つけてしまうことを小学校時代には繰り返してしまっていたし、一方高校生の時にはインターネット掲示板でバッシングを受け立ち直れなくなる一歩手前まで行きました。それでも、自分を表現する手段としてのことばは、自分にとってはものすごく大事なものとして位置づけられていました。

5つの

キーワード

きっかけ

ストーリー

○「ICT」のきっかけ

はじめてインターネットに触れたのが小学校6年生の時。卒業を前に、後輩に残すものを作ろうという担任の課題設定に対し、僕は小学校6年生が1年間ですべきことをHTMLページにまとめました。それが、ホームページを作ることに目覚めたきっかけです。以降、中学時代はホームページビルダーを使ってホームページを作ることに熱中し、独自ドメインまで取得しました。

高校生になると、ブログが流行し、MovableTypeをサーバーにインストールして個人ブログを持っていました。また、高校の部活動のホームページ管理を任せられましたが、そこで様々な問題を起こしてしまいました。同じく高校時代、演奏会のパンフレットを自分たちで作る「広報委員会」に属し、パンフレットづくりをこだわってこだわり抜いて行いました。

こうした、コンピューターを使ってWebやパンフレットという媒体に何かを表現することに、大きな喜びを感じていたのがきっかけです。

○「地域」のきっかけ

私の家は茨城県古河市というところにあります。茨城県の西の端ですが、生活圏は栃木・埼玉です。だからこそ余計に、地元愛が強い分、地元地域がなんとなく元気がないのにすこしさみしさを覚えます。

家の前にはかつて映画館があり、その映画館の名を冠した商店街の前では、毎年冬に名物の「提灯竿もみ祭り」が開催されていました。しかし、映画館廃業とともにその祭りも別会場へ移動。駅前である私の近所のさみしさは増すばかりです。そういえば、私の町内会は、市内を挙げて取り組む祭りに町内会として参加していなかったため、同級生でそうした祭りに出ている子がうらやましくてたまらなかつたのをいまでもよく覚えています。

もう少しさかのぼると、小学生のときに授業で行った街探検で、小学校区の端まで歩いてりんご屋さんに行った記憶があります。そのころから、自分だけが知っている街の良さというものを、すでに持っていたんでしょう。帰り道のりんごを今でも思い出します。

○「音楽」のきっかけ

運動が下手、という理由から吹奏楽を始めたのが中学1年生での決断。サクスが吹きたかったのに一番デカくて音の低いチューバという楽器になった時は泣きじゃくりましたが、今では自分の楽器こそ最高だと言えます。それから10年間、楽器を演奏することは生活の一部になっていました。そして、吹奏楽の活動を通して作り上げられてきた考え方も多くありました。

でも、音楽が人を元気にする、ということを感じたのは高校時代だったと思います。大好きなはずの音楽をする高校の吹奏楽部で、音楽そのもの以外でいざこざを起こして思い悩む時期が続く中、同年代の高校生が地元の駅前で金曜の夜に路上ライブをやっていました。私はみるみるその魅力に引き込まれ、金曜の夜はギター弾き語りの演奏をずっと聴いていました。その時だけ、悩みが薄らいで元気になれた。本当に葛藤と悩みが続くなかで、僕を救ってくれたのは、まさしく音楽だった。だから、音楽が人を元気にすると自信を持って言えるのです。

Pro-ject

前にだす
共にすすむ
ふりかえる

プロジェクトって何でしょうか。

授業やサークルに限らず、さまざまなシーンでさまざまな“プロジェクト”に関わってきました。

「こんなことをしてきました」という成果は、単なる事実だけでなく、達成・経験という名の自信として自分の身にしみ込んでいます。

しかし、その事実と自信にたどりつくには、たくさんの人との関わりがありました。

「いい」と思えることはむしろ少ないかもしれません。活動を通じて自分と向き合って、思い悩み迷う日々が長らく続いた時もありました。

だから、Pro-jectは、おもしろい。

だから、Pro-jectが、やめられない。

遠藤 忍

慶應義塾大学院 政策・メディア研究科

job2013@enshino.biz
<http://enshino.biz/job2013>
<http://twitter.com/enshino>
<http://facebook.com/enshino>

